

加来居屋敷遺跡

中津市文化財調査報告 第 50 集

2010

中津市教育委員会

第 4 節 小 結

ここでは、遺跡の年代を推定するために出土遺物の検証を行う。さらに周辺の歴史的現象の中で加来居屋敷遺跡がどのように位置づけられるかを考えたい。

1) 遺物の分類と年代的位置付け

土器・陶磁器類

今回検出した主な遺構は SD-1 であり、パンケース 4 箱分の土器類が出土した。内訳は瓦質土器がその大半を占め、陶磁器類は数点しか出土していない。陶磁器 (第 17 図)

白磁・青磁ともに出土するがいずれも破片資料である。

白磁は、内面に楡目文を持つ山本分類 VI-1b に相当しよう。時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半の資料である。他に 11 世紀代の口縁部玉縁の破片が出土したが、小片のため図化していない。青磁は稜花皿で、類例は津久見市津久見門前遺跡で見られる。15 世紀代と考えてよかろう。備前焼甕口縁部は、乗岡編年の「中世 5 期」で、15 世紀代に納まるものである。陶器 I 類は唐津焼底部で、17 世紀中頃から後半の資料。2 類は底部糸切りの資料。産地・時期共に明確にしえない (1)。

陶磁器が示す遺構の年代は 11・15・17 世紀代であるが、数が少なく流れ込みの可能性もあるため、遺構の年代を決定づけるものではない。

瓦質土器 (第 18・19 図)

握鉢は口縁部形態から 2 類に分けた。1 類は口縁部を逆「く」の宇状に折るタイプで、小柳編年の「IV 期」16 世紀前半から中頃の資料である。2 類は口縁端部に摘み出したような突帯を貼り付ける。類似の資料は宇佐市下林遺跡 H 区 SE-1 で出土している。同遺構からは 16 世紀末から 17 世紀前半の陶磁器が出土している (2)。

火鉢口縁部はその形態から 3 類に分類した。1 類は如意状の口縁端部を持ち、直下に菊花紋を付ける。2 類はスタンプ紋を持たず、端部は方形となる。3 類は方形の端部が外側へ突出する。2 類は 17 世紀初頭、3 類は 17 世紀後半以降の資料 (3)。

火鉢底部は 3 種類に分けた。1 類は底部付近に突帯を貼り付け、高台を逆三角形状にする。体部から見込みにかけてはなだらかに降下する。2 類は火鉢口縁部 2 類の底部で突帯を設けず、高台は尖り気味になりやや反る。体部から見込みにかけてはなだらかに降下する。3 類は突帯を付けず、体部と見込みの境目は急である。高台の有無は不明。底部はど

のような形式変化を遂げるか知らず、2類以外時期など明確にしえない。

甕は1種類のみ出土した。加来居屋敷遺跡12は、直立する口縁部を持ち、端部は方形に肥厚し、肩は張らず降下する。口径約45cm前後、灰白色で口縁端部と頸部の接合部の外面に縦方向ハケが残るが、その後外面全体にナデを行い、内面は丁寧にヨコナデする。同形式のものは下林遺跡II区SE-1で発見されている。直立気味に屈曲する口縁部を持ち、端部は方形に肥厚する。肩はあまり張らない。復元口径42cm、暗茶褐色で口縁部外面をヨコナデ、内面をナデ上げる。下林遺跡の資料は16世紀末から17世紀前半であるため、12も同年代が与えられよう。一方、これらより一段階前と推測できる遺物が長者屋敷遺跡(現、長者屋敷盲管遺跡)にて出土している(4)。

SK3出土資料で口縁部は直立気味に伸び、端部は方形に肥厚し、肩は強く張る。復元口径32.2cm、灰色で外面を格子目タタキ、内面を丁寧なヨコナデで仕上げる。遺構の年代は共伴遺物から16世紀代に比定されている。3点を比較すると、16世紀から17世紀前半に次のような形式変化を確認できる。すなわち、口縁部が伸び、口がやや開き気味になる、肩が張らなくなる、外面の器面調整に丁寧なナデを行う、法量が大きくなるという4点である。今後修正・細分される点もあるかと思うが大まかな流れとして理解したい。

2) SD-1の存続時期について

本遺構からはこれまで見てきたような遺物が出土している。それらから遺構の存続期間を考えたい。

遺物は縄文時代から近世のものが出土したが、その中心は中世から近世である。よって、遺構の時期も大まかにその範囲に収まるものと考えたい。次に具体的にいつ掘られたのかを考える。まず、溝という遺構の性格上、開口すれば様々な時代の遺物が入り込む余地があり、その上限は掴みにくい。II世紀代や15世紀代の陶磁器が見られることから、その時期に考えることもできるが断定できない。一方、下限については溝上層より16世紀末から17世紀前半の瓦質土器など近世遺物が多数出土しているため、その時期に比定できる。なお、溝下層から16世紀代の遺物41が出土しているため、16世紀代から溝の埋没が始まることも考えられよう。

以上のことから溝は下記のとおり変遷したと考える。

- ・開削 中世前半?
- ・埋没 16世紀末から17世紀前半

3) 遺構の性格

調査ではSD-1と2、SK-1を検出した。

SD-1は最大幅4.28m、最大深1.31m、長さ29.4mを測る。掘り方は東側より西側の立ち上がり急である。一般的な用水路とは規模が異なる点や、西側の守りを意識した掘り方を備えるなど、SD-1は何らかの堀として機能した可能性が高い。

SD-2はSD-1と接続する溝である。SD-1に比べ幅が狭く、規模は小さい。またSD-1と異なり西を指向する点などからSD-1とは異なる性格を有したものと考えられる。その延長に

は現在集落内を走る細道が存在するが、関連の有無は不明である。SK-1については用途不明である。

4) 加来居屋敷遺跡の性格 (第20図)

それでは、次に加来居屋敷遺跡の性格について考えてみたい。遺跡の立地上、西側の台地と本遺跡が関係深いことは容易に想像できる。この台地は小字「居屋敷」であり、約40戸が軒を連ねている。

ところで、この集落には「義経」を苗字とする家屋が数戸存在する。これは後述するように源義経が大畑城の築城を命じたという故事に由来するものである。集落の北側には賀来氏が建立したとされる萬福寺(⑤)があり、義経自彫とされる薬師如来像も伝わっている。さらに集落には「義経堀」と称された溝が存在したことがわかっている。伝承地には諸説あり、第20図①の農道(平成4年頃建設)の集落側に存在する水路がその一つで、写真1は昭和58年以前にA地点から矢印方向を撮影したものとされる(5)。撮影された範囲では竹藪下に小規模な水路が存在しており、現在この水路は幅30cm程の側溝になっている。この水路はB地点で南へ向きを転じるが、地元ではA地点からB地点までを「義経堀」と呼んだらしい。また古老の話によると④周辺にも「義経堀」と呼称した溝が存在したとのことである。③周辺は「木戸」と呼ばれた伝承がある。

それでは、次にこれら「義経堀」と今回検出した堀跡の関連を考える。A-B間の水路はB地点で南向きに曲がり、約1mの幅を保ちながら調査区方向へ伸びる(写真3はC地点)。その後、溝は調査区北側で現道下にその姿を消す。そして、その延長線上には今回発掘調査で検出したSD-1が存在している。このことから、後世の道路建設により遮断されているものの、この溝とSD-1は同一の溝である可能性が極めて高い。さらに②に注目すると、地元で「下溝(したみぞ)」と呼ばれる溝が存在する(6)。溝の集落側はいびつな形の畑地が形成されていることから、元々幅の広がった溝を埋め立てた可能性がある。往時はこの台地の北、東、南の三辺が堀で囲まれていたと考えることができる。一方、集落内に存在したとされる「義経堀」は、集落内を画する溝であったものであろうか。

それでは次に、この集落内に如何なる施設が存在したのかが問題になる。その際参考になるのが、⑥の賀来家に伝わる「竹田屋系図」である。その賀来駿河の代の添え書きに、「…長男駿河常二念フ豊前国賀来村ハ先祖代々ノ采地ニテ久シク田中城ノ主トシテ住居セシタル処ナレバ…」という一文がある(7)。系図からは賀来氏が居住した屋敷を当時田中城と呼称していたと解釈することができる。③の木戸の伝承もこれに関連するものであろう。

ここでは、台地を守るために三辺に堀が存在したこと、検出したSD-1はその一部であった可能性が高いこと、台地上には「田中城」と呼称された重要施設が存在しており、賀来氏はここに居住した可能性があることを確認しておきたい。

5) 加来の中世と加来居屋敷遺跡

これまでに加来居屋敷遺跡の時期や遺跡の性格について検討を加えてきた。ところで、加来地区については大畑城の攻防に関連した賀来文書や成恒文書などの古文書研究による

歴史叙述が行われている。そこで、以下ではそれらの研究を踏まえて賀来氏や大畑城の歴史を概観し、既往の発掘調査により発見された城館などの遺構、周辺の地形、地目などに依りながら加来居屋敷遺跡との関連性を探り、加来居屋敷遺跡が加来地域の中でどのように位置づけられるか考えてみたい。

a. 賀来氏と大畑城

賀来氏と大畑城については中津市史（8）や下毛郡誌（9）にて詳述されているので、ここではその概要を確認する。

加来と賀来氏との繋がり、元暦元（1184）年に源義経が緒方惟栄に大畑城を含む5城の築城を命じたことから始まる。大畑城に入城したのは賀来安芸守惟興という人物である。賀来氏は応永や応仁の頃（14世紀末から15世紀中頃）は大内氏に与しており、大友軍の豊前侵入を阻止している。ところが、天文20（1551）年に大内義隆が陶隆房によって滅ぼされると、中国地方は混乱状態となる。その間隙を抜い、大友氏が豊前へ力を伸ばし始める。弘治2（1556）年には、大友義鎮が大軍を發し、豊前を侵略したことから賀来氏を含む多くの土豪はその配下になったようである。そ

の後、天正6（1578）年に大友宗麟が日向耳川の戦いで島津氏に大敗すると、下毛郡では天正7（1579）年に野仲氏が反旗を翻し、大友方の諸城を攻略していく。しかし、賀来安芸守統直の居城である大畑城は落とすことができなかった。野仲氏は天正14（1586）年まで大畑城を48回攻めたといわれているが落城していない。しかし、天正16（1588）年、大畑城は中津に入部した黒田氏に攻められ落城し、統直は逃亡中に秣大炊助の手にかかり死亡したとされる。

加来居屋敷遺跡と関連深い事項は天正16（1588）年の大畑城落城であろう。SD-Iは16世紀末から17世紀前半にかけて埋没しており、大畑城落城頃の出来事ということになる。つまり、大畑城落城に伴いSD-1が埋められたとの想定が可能である。

b. 過去の発掘調査の成果と伝承（第21図）

調査地周辺では各種開発に伴って発掘調査が実施されている。

昭和61（1986）年、バイパス建設に伴う黒水遺跡の調査（③）では、13世紀後半から14世紀後半の溝や土墳墓などが検出されている。最も大きな溝遺構SD-6は幅3.22～4.60m、深さ0.45～0.85mを測る。該期の有力者の居住区域を発掘した可能性が高い。大坪遺跡（④）では11世紀か12世紀頃の土墳墓が発見された（1a）。平成17（2005）年、中津市教委により実施された黒水遺跡秤香地区の調査（⑤）では、長さ約8.6m、幅約2.6m、深さ0.6mの16世紀末に埋没した溝状遺構が発見されている（11）。同時期に行われた隣接する県道拡幅工事に伴う調査（⑥）ではこの溝の延長部分（SD-4）が検出されると同時に、それとは別の溝状遺構（SD-3）が検出された。SD-3は直線で約64m、最大幅は約4m、深さ0.6～0.7mを測り、16世紀代の遺物が出土している。両溝は異なる施設の北側を画するものとの位置づけがなされ、寺か居館跡と推定されている（12）。また、道祖神社地（⑩）は地元で「弁城」と呼ばれる所で、源義経に仕えた武蔵坊弁慶が築いたといういわれを持つ。ま

た天正 16 年の黒田氏との合戦ではこの城に立て籠もった「弁城小六」なる人物が戦闘で討ち死にしたとの言い伝えがある (13)。

既往の調査の内、黒水遺跡の発掘調査では加来居屋敷遺跡 SD-1 とほぼ同規模の溝状遺構が検出されていることがわかる。また、拝香地区の溝状遺構は 16 世紀末に埋没しており、加来居屋敷遺跡 SD-1 と同時期に廃絶していることに注目したい。

c. 周辺の地形、地目について

次に周辺の地形、地目などについて考える。大畑城を中心に加来地域の地形を概観してみると、大畑城の所在する高台から南は黒水遺跡や道祖神社が所在する台地が広がり、東方は犬丸川へ向かって傾斜し水田地帯となる。水田地下には近代に暗渠排水が設置されており、水はけがあまりよくないことが推測できる。北側は谷水田を挟んで台地が広がりその東端に加来居屋敷遺跡が所在している。

城館に係る小字は加来居屋敷遺跡の「居屋敷」、「藤本口」、「井検 (いろう) (14)」、「門田」、「法垣」と多数見られる。地目を見ると、宅地が加来居屋敷遺跡や黒水遺跡周辺、稲男集落周辺に集中していることがわかる。また、宅地縁辺の山林や雑草地は宅地を囲むような形となる。これは土塁の痕跡であり、付近を流れる水路は堀の役割を担ったものと考えられる。

このような状況を見ると、大畑城の堅固さを改めて確認することができる。つまり、大畑城の南は黒水遺跡の屋敷群によって固め、北は谷水田を天然の堀とする。谷水田の北方は、「藤本口」や「井検」などで固め、東端の守りは賀来氏の居住した屋敷群 (加来居屋敷遺跡) が担う。さらに東側の水田を水はけ不良地と想定すれば、この水田は寄せ手の侵入を阻む役目を果たしたことが推定できる。戦時には領主層は大畑城に詰め、家臣団はその周辺で守りを固めたといえる。そのように考えると、黒水遺跡の屋敷群も加来居屋敷遺跡も広義の意味で大畑城の一部と考えることが可能であろう。大畑城が落城した 16 世紀末に加来居屋敷遺跡 SD-1 や黒水遺跡拝香地区溝状遺構がその役割を終えることは、大畑城とこれらの屋敷群との密接な関係を示唆するものである。なお、大畑城跡に宅地の地目が存在しないことは、平時はそこが居住の空間ではなかったことの傍証になろう。大畑城の城主賀来氏は、加来居屋敷遺跡の堀が守る台地上で平時は起居したものとすることができる。

6) 結語

これまで、加来居屋敷遺跡の加来地域の中での位置づけについて述べ、大畑城周辺の加来集落や黒水集落に屋敷群が広がり、それらが大畑城と深い関わりをもつことを指摘してきた。ところで、このような景観はいつ生み出されたのであろうか。各時代における景観の復元が今後の課題であろう。今後の研究を期待して、これまで述べてきた主な点を箇条書きにしてまとめたい。

① 加来居屋敷遺跡 SD-1 は、集落の三方を囲む東側の堀の一部であり、16 世紀末から 17 世紀前半にかけて廃絶した。

② 台地上には「田中城」と呼ばれた賀来氏の居住した屋敷が存在した可能性がある。

③ 大畑城を核にして周辺に広がる加来居屋敷遺跡や黒水遺跡などの城館関連遺構は、本城である大畑城を守る屋敷群と理解することができる。

註

(1) 陶器については佐藤浩司氏のご教示を得た。2類については11世紀から12世紀の東海産山茶碗の可能性を指摘された。

(2) 江藤和幸「下林遺跡11区」r宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宇佐市教育委員会 1994

(3) 江藤和幸氏（宇佐市教育委員会）ご教示。

(4) 高崎章子「長者屋敷遺跡」『中津市文化財調査報告第26集』中津市教育委員会 2001

(5) 撮影者・写真提供、秋吉秀康氏。

(6) 義経堀や下溝など付近の伝承については秋吉氏ご教示。

(7) 系図によると賀来駿河は統直の孫で、元和9（1623）年に加来村に帰村している。竹田屋は宝暦11（1761）年に賀来甚兵衛が別家し称した屋号。系図については秋吉氏が写真撮影したものを実見した。系図自体は明治時代以降に元本を基に書き直されている様子。系図の研究・考証は今後の課題であろう。

(8) 中野幡能「第4章中世史」桧垣元吉「第5章近世史」「中津市史」中津市史刊行会 1965

(9) 大分県下毛郡教育会「45賀来氏」「下毛郡誌」国書刊行会 1980

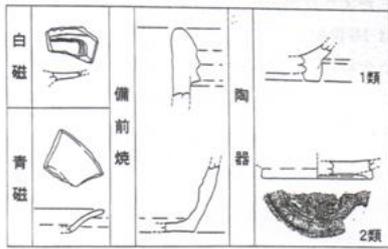
(10) 後藤一重「黒水遺跡 大坪遺跡」「中津バイパス埋蔵文化財調査報告書（I）」大分県教育委員会 1988

(11) 花崎徹「黒水遺跡秤香地区」r中津市文化財調査報告第40集』中津市教育委員会 2006

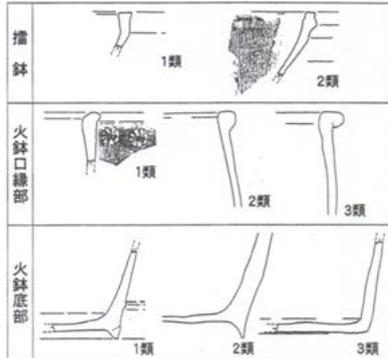
(12) 栗田勝弘「黒水遺跡拝香地区」「大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第34集」大分県教育庁埋蔵文化財センター 2006

(13) 今永正樹「ふるさとの歴史」中津市 1985

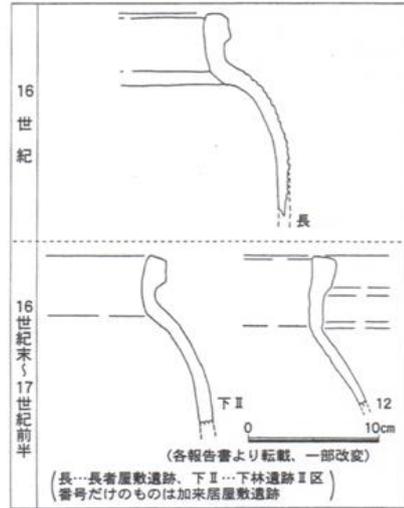
(14) 「井楼」は「せいろう」とも読み、戦時に偵察のためにつくられる櫓とされる。渡辺勝彦「城郭用語辞典 櫓」「日本城郭大系 別巻H」新人物往来社 1981



第17図 陶磁器一覧



第18図 瓦質土器口縁部・底部分類図



第19図 瓦質土器口縁部変遷図 (S=1/4)

る。伝承地には諸説あり、第20図の調査区に示す。



第20図 調査区周辺図 (S=1/5,000)



写真2 農道 (現況)



写真3 C地点 (南から)



写真1 農道 (昭和58年8月)